

# 「手づくり郷土賞」<sup>ふるさと</sup>から見えてくる社会資本整備の今日

## 1. はじめに～「手づくり郷土賞」とは～

「手づくり郷土賞」について書きたいと思う。郷土賞と書いて「ふるさとしょう」と読ませる。昭和61年度に始まる歴史の古い賞で、当時の建設省の主催で始まり、今年で27年目を迎える。現在でもこの分野では唯一の国土交通省主催の表彰事業で、受賞者は国土交通大臣表彰を受ける栄誉を浴することになっている。

今年度は9月に応募を締め切ったばかりなので、状況はまだわからないが、昨年度までに合計1,331作品が手づくり郷土賞を受賞しており、このうち平成17年度から始まった大賞部門には合計68作品が選ばれている。これだけ受賞作が多いうえ、受賞作品には副賞として盾が授与され、多くの場合、盾は記念として現地に展示されているので、読者の身近なところにも受賞作のひとつやふたつはあるのをお気づきになった方もおいでではないだろうか。

私は賞創設時は関与していないものの、ここ10年ほどは選定委員会の委員をつとめ、近年は委員長を拝命している。そのこともあって、永年応募書類をくまなく見てきたが、受賞作の傾向が時代を反映していて興味深いのである。

## 2. 応募部門も時代と共に変わる

開始から平成7年度までの10年間は水辺や広場、街角などテーマを設けてそれぞれ30選を表彰するといったスタイルだった。いちばん多いのが平成2年度の4テーマ合計120選である。まさしくバブル経済のピークの年である。この頃は私自身は選考に関わってはいなかったが、受賞作を見るとモールや大規模な公園など、お金も力も入った作品が多かったといえる。

このあと5年ほどテーマを設定しない年が続き、平成13年度からは施設整備部門と地域活動部門とに分けて募集することになった。それまでの手づくり郷土賞がいわばハードな施設整備に着目した賞だったところから、ものをつくるだけでなく社会資本の維持管理のために活動することも重要だとしてそうした活動を行っている団体を対象とした地域活動部門が設けられたのである。これに対して従来型のハード整備は地域整備部門に分類されることになった。

さらに賞創設20周年目の平成17年度からは、かつて手づくり郷土賞を受賞した作品がその後も地域に愛され、大切に管理されているだけでなく、周囲にも良い影響を与えているような模範例を顕彰すべきという意見があり、以前に手づくり郷土賞に選定された案件を対象とした大賞部門が新設

東京大学 副学長 にし むら 西村 ゆき お 幸夫



された。これも比較的長い歴史を有する賞であるからこその発想だといえる。

### 3. 近年の傾向

平成20年度からは、地域整備部門と地域活動部門とが統合され、一般部門となり、これと大賞部門の2部門制となって今日に至っている。地域整備のプロセスそのものがその後の維持保全に向かう地域活動を最初から内包するように仕立てられたプロジェクトが多くなり、両者を截然と分けることが難しくなってきたからである。そのうえ、時代を反映してか、そもそも新規の地域整備の案件が少なくなってきたため、地域整備部門を独立させておく理由がなくなってきたということもあると思う。

さらにいうと、地域活動の対象も当初はまちづくり事業などのようにどちらかというとハードな施設や環境を維持・向上させていくような活動が中心であったが、近年は自然環境の保護活動や歴史の道の保全活動など、近代以降の公共事業とは直接関係のない活動も多く含まれるようになってきた。こうした活動対象も広い意味で言うと社会资本であるのだから、その維持管理に資する活動は当然表彰の対象としていだろうといった議論が選定委員会でも交わされたのを記憶している。

こうした傾向は大賞ではさらに顕著で、昨年度の大賞受賞の4作品は、ガーデンシティみしま(静岡県三島市)の街中がせせらぎ事業をはじめとした多面的な活動、若狭鯖街道熊川宿(福井県若狭町)の歴史を活かしたまちづくり、日本三大名醸地のひとつ西条(広島県東広島市)の酒蔵のあるまち並、豊後高田(大分県)の昭和の町の観光まちづくりとなっており、歴史的な資産や小河川といった自然を再発見し、これをうまく活かして多彩なまちづくり活動を継続している事例が並んでいる。

いずれも身近な公共財である資産(これこそ生活の基盤を形作っているインフラといえるだろう)を活かすことが活動の基本となっている。社会基盤はつくるのではなく、いかす時代になってきたということを賞の選考を通じてもまざまざと実感させられる。

ただ、このところ受賞作品の数が20件に届かない年が続く気配があることが気がかりである。ハード整備は限られていたとしてもソフトな展開はどこでも可能なはずである。魅力的な応募案件が続いて、選定委員たちが悲鳴を上げるような、そんな活動の盛り上がり各地で起きてくることを期待したいと思っている。